

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成23年4月9日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 京都大学大学院薬学研究科ゲノム創薬科学分野

職 名 教授

氏 名 辻 本 豪 三

事業区分	平成23年度・シンポジウム等開催助成		
事業内容	第6回国際受容体・シグナリング・薬物作用シンポジウム		
開催期間	平成23年4月1日 ～ 平成23年4月2日		
開催場所	京都大学薬学部講堂		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有(抄録集)		
会計報告	事業に要した経費総額	8,270,000 円	
	うち当財団からの助成額	1,500,000 円	
	その他の資金の出所	上原記念生命科学財団、日本製薬団体連合、薬学研究奨励財団、永井薬学奨励財団、サントリー生物有機科学研究所、創薬薬理フォーラム	
	経費の内訳と助成金の用途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	事務費	1,244,496	128,026
	人件費	3,664,000	0
	旅費・交通費	411,280	0
	印刷・制作費	737,320	737,320
	通信・運搬費	861,610	0
会議費	128,190	0	
機材・備品費	634,654	634,654	
招聘関係費	588,450	0	
合 計	8,270,000	1,500,000	

成果の概要

第6回 国際受容体・シグナリング・薬物作用シンポジウム

京都大学薬学研究科 教授 辻本 豪三

この度、第6回 国際受容体・シグナリング・薬物作用シンポジウム「臓器別疾患と新規治療法の開発」-「The 6th International Symposium on Receptor Mechanisms, Signal Transduction and Drug Effects -Development of Novel Therapy to Specific Disease in Organ-」を平成23年4月1日から2日までの2日間、京都大学薬学部記念講堂に於いて開催しました（ホームページ <http://gdds.pharm.kyoto-u.ac.jp/irs2011/>）。本シンポジウムは、生体内での情報伝達と薬物作用の要となる受容体の構造と機能や薬物の作用に関する最新の研究成果について、国内外の研究者が一堂に集い、議論し情報交換するものです。第1回を新潟薬科大学・長友孝文教授が1995年に、第2回を北海道大学・野村靖幸教授が1997年に、第3回を東京大学・長尾拓教授が2000年に、第4回を福井医科大学（現福井大学医学部）・村松郁延教授が2003年に、第5回を静岡県立大学・山田静雄教授が2007年に開催し、大きな成果を挙げました。今回のこの国際シンポジウムは、日欧米、そしてアジアの研究者が中枢神経系、循環器系、呼吸器系、消化器系及び泌尿器系機能の中核となる、受容体に関する多くの基礎・臨床応用研究成果を総括し、新たな治療戦略、受容体研究の革新的方法論などについて徹底的に議論するとともに、研究者間の国際交流推進を図ることを目的としています。更に、本分野の発展を期して、生体機能維持における受容体の役割と、その異常による臓器別疾患の解明を基盤として、これまでに個別な発表のみで統合的議論がなされて来なかった具体的項目、生体内各臓器における受容体の機能、疾患および治療薬の関係、受容体研究の革新的技術、新規医療薬品候補化合物とその探索法と薬物作用解析法について発表・議論する場を提供できることを趣旨としています。本シンポジウムは1日目において稲垣暢也氏（京都大学医学部教授）によるランチョンセミナーと2日目の山下俊英氏（大阪大学医学部教授）による特別講演及び、斉藤源頭氏（鳥取大学医学部准教授）によるランチョンセミナーが行われ、いずれも世界トップレベルの貴重な講演内容でした。また、2日間を通して中枢神経系、循環器系、泌尿器系等の専門分野において、5つのセッションに分かれて招待講演者による講演が行われ、全てにおいて非常に活発な議論が行われました。さらに2日間を通して多数のポスター発表も行われ、こちらも盛んな情報交換が行われました。このポスター発表では組織委員による投票により、3件の Young Investigator Award が選ばれました。

Young Investigator Award 受賞者は閉会式にて、1人ずつに賞状と楯及び賞金が手渡されました。以上より、本シンポジウムは国際的かつ熱気溢れる雰囲気の中、成功裏に終了することができました。開催直前の東北関東大震災、更に原子力発電所の問題から多くの外国講演者が直前になり（各国の勧告に従い）来日取り止めという異例な状況でありましたが、特に他の全国規模の学会の年会（薬理学会、薬学会、日本医学会など）が次々と中止または延期という事から、特に国内研究者よりその開催を強く求められました。また、本会の開催趣旨が、学術振興による人類福祉の向上という観点から、開催が震災復興への出発点となることを期待して敢えて開催という判断となりましたが、参加者全員からその開催に強い支持の意見がありましたことは主催者側としても大変心強いものでした。海外主催者側のオランダ・アムステルダム大学薬理学・臨床薬理学講座 Martin Michel 教授からはTVカンファレンスを用いての遠隔メッセージなど、海外講演者も出来るだけ参加できるよう努め大いに議論できたシンポジウムでありましたことをご報告させていただきます。最後に、本シンポジウムの開催にあたり、助成を賜りました京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。



Y I A受賞式、受賞者と辻本



熱気溢れるポスター発表